子ども・若者支援専門職における知とその獲得過程

ー実践的に育まれる学際的な知に関する一考察ー

○ 福島県立医科大学　　氏名　立柳　聡 (004050)

［キーワード］学際的協力、技能知、体験的に学ぶ

１．研 究 目 的

演者は、長らく児童厚生員、放課後児童指導員として臨床現場で働いた後、大学の教員となった。以降、担当講座の一つとして、後継者の養成にも当たることとなった。しかし、その折々にこうした方法でよいのだろうかと確信が揺らいだり、学生たちに伝えたい要点なのだが、どうしてもうまく伝えきれない何かの存在に気づき、新たな学びと試行錯誤を繰り返すことになった。果たして、子ども・若者支援を担う専門職は、どのように養成されるべきものであろうか。演者の今日的な認識を踏まえ、子ども・若者という存在の特色と支援に求められる知のあり方を鍵として考察するものである。

２．研究の視点および方法

①　子ども・若者をドラスティックな成長・発達の過程に位置する人間と捉え、その順当な展開を促す上で有効な支援のあり方とはどのようなものか考察する。

②　子ども・若者を支援することの本質は実践である。実践を展開する上で求められる知とはどのようなものか。演者がこの分野の研究を先駆的に開拓してきたとみる人類学や認知科学の知見を拠り所に考察する。

③　演者の臨床経験を踏まえて考察する。

３．倫理的配慮

「日本社会福祉学会　研究倫理指針」に基づいた研究を展開する。本研究のおいては、「第２　指針内容　A　引用」は取り分け関係が深い項目となるため、特に留意する。

４．研 究 結 果

かつて演者は、それまでの子どもの育ちの支援をめぐる研究や実践のあり方を総括して、次のように指摘した。「…研究者は、子どもの育ちをめぐる社会問題や生活課題などの指摘に止まることが多く、それを解決・克服すべく、子どもたちを自主的な学びに誘うために、直接処遇の場面で「発達」の知見を考慮した有効な支援方法なり、援助技術を明らかにするための研究は手付かずでした。人間のライフステージにおいて、「乳幼児期」、「学童期」、「青年期」などと呼ばれる時期…は、細かな「発達」段階の節目が知られる時期でもあることから、そうした特色も踏まえて、…精緻な研究が積極的に行われるべきものだった。…そもそも「子ども」の育ちは教育や福祉、保健・医療などの総合的な力によって支えられる性格のものであり、本来、学際的な協力によってこそ、「子ども」の本質はあきらかになる…」（立柳聡・『子育ち学へのアプローチ』・エイデル研究所・2000 年・p.16 及び 37）

演者の臨床経験から些細な例をあげれば、学童クラブで他の子どもといざこざを起こしてしまった子どもの心の背景は多様で、親に十分甘えられないフラストレーションなどが底流にあることも結構ある。この場合、善意であっても、性格の矯正や規範を教えるなどの意図で叱責する教育的な対応は、それこそ火に油の結果を招くことが多いと思われる。むしろこの子の心中や背景を洞察し、そのまま

何も言わずにしばらく抱きしめてあげる受容的、福祉的な向き合い方こそ、真に有効であると確信する。発達段階や発達上の課題も異なり、個性や固有な生活の背景を持った動態的な存在である多くの子どもたちのそれぞれの今に、どのような支援が必要であったり、有効であるのか。教育的なもの、福祉的なものなど等、これを瞬時に判断し、実践できる知こそが支援の現場において必須に重要なものなのである。従って、その本質やその形成過程を明らかにすることが問いとなる。

これを考えるために、演者は人類学や認知科学の知をめぐる学説史的な研究に取り組み、研究の到達点を確認しつつ、考察を進めた。特に示唆的と思われる指摘を以下にいくつか紹介し、要点を要約してみたい。ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、規則に従うことは、繰り返される慣習や訓練によって生み出される一種の実践であることを指摘する。(『哲学探究』・大修館書店・1976 年、他) ギルバート・ライルは、事実や真理を知ることと、やり方を知ることとは別の知であるとし、後者は訓練や日常経験の積み上げの中から次第に獲得され、それに習熟してくると、行動に一定の傾向性を伴うようになることも指摘している。(『心の概念』・みすず書房・1987 年)「ハビトゥス」の概念で有名なピエール・ブルデューは、実践的につむぎ出される知について、多くの言説を残している。「知恵ある無知」と称して、技法に習熟した者が、実際に実践しているにも関わらず、言葉によってそれを的確に表現できないような実践が存在することや、それを習熟者があえて教授しようとする場合、「準理論的」な思考によって無理な説明に陥り、かえって実践の全体像を明らかにできない矛盾を引き起こすこと、習熟者自身がどうしても自分の実践を語りきれないことことが実践知の特徴であることを指摘した。(『実践感覚Ⅰ・Ⅱ』・みすず書房・1988 年・1990 年、他) ジーン・レイブとエティエンヌ・ウェンガーは、「実践コミュニティ」という概念を提起し、様々な関心や興味を持つ仲間が集い、多様な資源を活用し、他者と折り合いながら学習を深め、実践のやり方を次第に身につけて実践できるようになるプロセスを明らかにした。このプロセスで個々の役割や相互の関係、アイデンティティも変化することも指摘している。(『状況に埋め込まれた学習』・産業図書・1993 年) 京都大学の楠見孝は、経験からしか獲得しえない言語化しにくい知の存在を「暗黙知」として概念化している。(『週間医学界新聞』第 3065 号・医学書院・2014 年)

結局、これらを要約すると、何らかの目的に迫る実践を果たす上で有効なやり方は、集団的な学びを伴いながら繰り返される実践の中からのみ次第につむぎ出され、そこに参加する人々に身につけられていく（共有されていく）言説化できない知であるということになろう。これを、便宜的に、実践を踏まえてのみ生み出される暗黙知が本質であり、真理や事実に関する学問知や種々の経験も取り込みながら展開する「技能知」と呼ぶことにしたい。

5. 考察

以上を踏まえ、技能知の獲得過程を念頭に、子ども・若者支援を担う専門職の養成において今後期待されることと課題を、次のように考察した。

① 基礎教養としての学問知を座学的に学ぶことよりも、実践的、体験的に学ぶ機会を圧倒的に多く含んだカリキュラムを構想すること。

② 学習者に対し、体験から導き出された反省や悟りの集約を促す指導の重要性。

③ 福祉、教育、保健・医療など・子どもや若者の育ちの支援に関わる重要な分野の臨床現場は、通常、集団的な職場であり、そこで展開する実践も集団的なものである。よって、経験の集約も集団的に行われるべきであり、そこを目指す学習者には、集団的な学びの機会を多く提供すべきであろう。

④ ①～③を少しでも有意義なものにしていく上で、教員なり、学習支援者の適性や能力を考える必要があろう。演者の個人的な臨床経験から考えると、そこにも技能知がものを言う。優れた技能知を有する臨床現場のスタッフたちをこそ、教員として積極的に採用すべきと考える。医学部に医師でない医学系の教授はいない。プロスポーツの監督で自らが選手でなかった者はいるだろうか。指導のあり方やカリキュラムを構想する上でも、技能知が必須のものと悟られているからであろう。